

Book Review 36-8 情報 #あいまいさに耐える

『#あいまいさに耐える - ネガティブ・リテラシーのすすめ-』（佐藤卓己著）を読んでみた。著者は京都大学大学院教育学研究科教授などを経て、現在は上智大学文学部新聞学科教授、京都大学名誉教授。専攻はメディア文化学。『『キング』の時代』で日本出版学会賞・サントリー学芸賞受賞。『ファシスト的公共性』で毎日出版文化賞受賞。

「情報」という言葉は、明治時代に軍事に関わる用語として使われていた「敵情（状）の報知」、「敵情（状）の報告」などの表現を短縮して造られた。現在、中国、韓国では「情報」とは軍事用語として使われているようだ。

さて、「あいまいさに耐える」は総合診療医にとって身に着けるべき能力である。それを最近では蒂木蓬生氏が「negative capability」という言葉に置き換えてから、総合診療の分野ではますます注目されてようになった。本書は、SNS などから得られたあいまい情報に対して即決で態度を表明するのではなく、あいまいさにしたまま耐えて、時の力で正解が出るまで待つという「ネガティブ・リテラシー（消極的な読み書き能力）」の重要性を説いている。

はじめに、輿論（よろん）と世論（よろん、せろん）の違いについて言及している。学識経験者などが考え抜いて出したものが輿論、SNS 等に溢れるあいまい情報に飛びつくのが世論だそうだ。

この辺について著者が書いた論文や新聞記事から様々なことが述べられているが、畢竟、世論に流されず、輿論が大事ということで一貫している。著者は、輿論が掲載された総合雑誌をほとんどの人が読むこともなく、SNS などの世論に翻弄されている現在社会を嘆いている。

そこで、著者が主張するのは、「ネガティブ・リテラシー」の大切さである。すなわち、情報過剰時代にあっては、あいまいな（真偽のはっきりしない、納得できる根拠のない）情報はできるだけスルーして判断を保留することを勧めている。なぜなら、時間が経つと、真偽がはっきりし、熟慮された納得できる意見（輿論）が出てくるのが往々にしてあるからである。現在にあっては、知識人には短絡的で一時的な世論に流されず、輿論（クリティカル・シンキングが必要で耐性思考とも訳される）をまとめあげていくことが求められている。

この能力が重要であることは理解できるが、現在社会でこの negative literacy がどれだけの力を発揮できるのかは些か疑問が残る。総合診療医が negative capability を身に着けて、患者さんと一緒になってあいまいさに耐え続けても、医療界でほとんど力を持ちえない構図に似ていないだろうか。